

都道府県・ 指定都市番号	44	都道府県・ 指定都市名	大分県	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科名	国語
研究課題	<p>学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究</p> <p>②「読むこと」において、対話・話し合い・相互評価など、生徒同士の協働性を重視した言語活動を通して思考力・判断力・表現力等を効果的に育成する学習・指導方法及び学習評価の工夫改善についての研究</p>				
ふりがな 学校名（生徒数）	<p>おおいたけんりつなかつみなみこうとうがっこう 大分県立中津南高等学校（597名）</p>				
所在地（電話番号）	<p>〒871-0043 大分県中津市高畑 2093 番地 電話：0979-22-0224 FAX：0979-23-4678 e-mail：a32810@oen.ed.jp</p>				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<p>http://kou.oita-ed.jp/nakatuminami</p>				
研究のキーワード	<p>(1) 「読む能力」を育成するための「対話的学び」 (2) 学習評価</p>				
研究結果のポイント	<p>○ 「対話的な学び」は生徒の関心・意欲・態度も含めた学力の向上に有効であることが検証された。</p> <p>○ 「読む能力」を継続的に高めるためには、高次の力の前提となる力をバランスよく育成しておくことが望ましいことが分かった。</p> <p>○ 単元全体の学習活動に関する評価は、単元の導入期若しくは中盤と、単元の終わりごとに記述物によって行うことで効果的に実践できる。</p>				

1 研究主題等

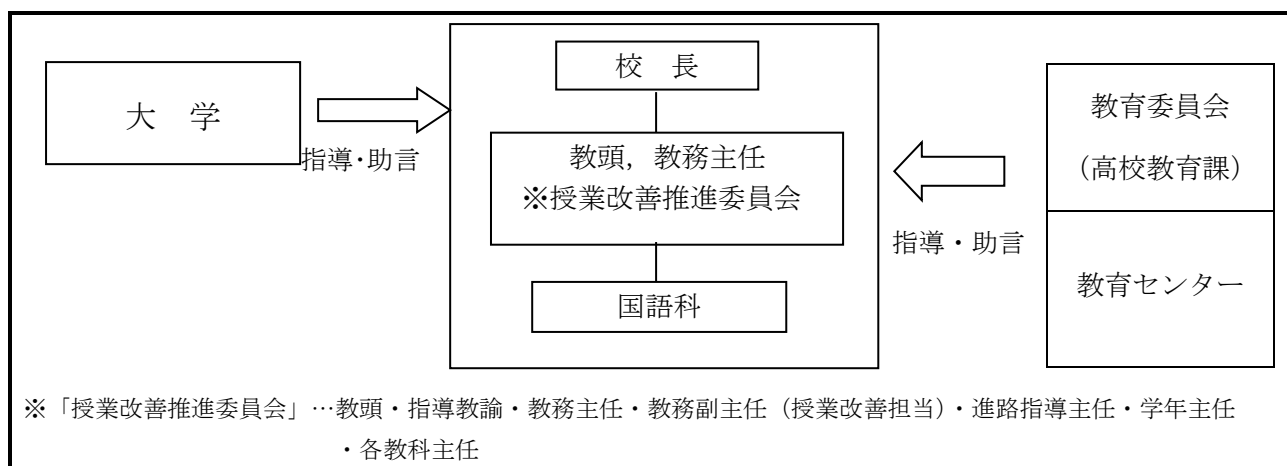
(1) 研究主題

対話的な学びを通して「読む能力」を育成するための、「国語総合」における効果的な学習指導及び学習評価の工夫改善についての研究

(2) 研究主題設定の理由

進学校である本校では、生徒の進路希望の達成に向けて「知識・理解」に比重を置いた授業が不可欠との考えのもと学習指導に取り組んできた。この学習指導は、一定の成果を収めてきたと考えられるものの、時代の流れ、求められる資質・能力の変化を踏まえ、現在は、言語活動を通して思考力・判断力・表現力を高めるための授業改善に全教科で取り組んでいる。その中で、生徒は与えられた課題に対して、教師の指示に応じて自身が持つ知識を活用したり、他者との意見交換をしたりするものの、教師側は生徒が課題解決に向けて主体的に交流しながら、思考力・判断力・表現力等を高めていく授業への転換に壁を感じているところである。国語科においては、言語に関する能力を育むとともに、他者と協働するなどして自己の考えを論理的にまとめ、表現する場面を効果的に設定するとした本校の目指す授業づくりにおいて中心的な役割を担う教科であることから、学習指導及び学習評価の工夫改善について一体的に取り組み、高等学校国語科における観点別評価の充実、特に生徒による主体的な言語活動を取り入れた授業における「関心・意欲・態度」と「思考・判断・表現」との2観点の評価方法及びその相関について研究し、他教科にもその成果を波及させることが求められる。以上より、対話的な学びを通して「読む能力」を育成するための効果的な学習指導の在り方や観点別学習評価の工夫改善を研究主題として設定した。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成28年度	<p>4月：入学時アンケートによる生徒の学習状況及び学力状況の把握</p> <p>5月：中学校学習指導要領に基づく、本校独自の意識調査アンケートの実施</p> <p>6月：意識調査等に基づき、本校国語科として「生徒につけさせたい力」の策定</p> <p>7月：年間指導計画の検討（「教材ベース」から「能力ベース」のものへ）</p> <p>8月：「読む能力」を育成するための授業法の研究 授業デザインシート（単元指導計画書）の新規作成</p> <p>9月：先進校視察（岡山県立倉敷南高校・和気閑谷高校）</p> <p>10月：先進校視察の還流報告及び視察結果を踏まえた授業改善の取組</p> <p>11月：文科省調査官による、研究指定校訪問と大分県高等学校国語授業研究会を同時に開催</p> <p>12月：文科省調査官の指導及び上記研究大会を受けて、授業方法の改善のための協議・検討・実践</p> <p>1月：学習評価に対する協議・検討</p> <p>2月：広島大学大学院 田中宏幸教授による、授業研究と評価に係る講義 意識調査を再度実施し、比較・検討</p> <p>3月：今年度の研究の振り返りと来年度に向けて研究の方向性を検討</p>
平成29年度	<p>4月：本年度の研究の重点事項の確認</p> <p>5月：①各学年での「付けさせたい力」を設定 ②「単元の目標シート」を作成 ③「授業振り返りシート」を作成</p> <p>9月：先進校視察（神奈川県立多摩高等学校・松陽高等学校）</p> <p>10月：①広島大学大学院 間瀬茂夫教授による、授業研究と評価に係る講義 ②文科省視学官による、研究指定校訪問と大分県高等学校国語授業研究会を同時に開催</p> <p>11月：文科省視学官の指導及び上記研究大会を受けて、改善のための協議・検討・実践</p> <p>12月：2年間の研究の振り返りとまとめ</p> <p>2月：今後の授業と評価の方向性について、協議・検討</p> <p>3月：今年度の実践の結果を踏まえた、来年度の年間指導計画の作成</p>

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ①「対話的な学びを通して『読む能力』を育成するための効果的な学習指導の在り方」について
- ②「観点別学習評価の工夫改善」について

(2) 具体的な研究活動

- ①「対話的な学びを通して『読む能力』を育成するための効果的な学習指導の在り方」について
研究の2年目に当たり、まず、本県の小中学校の授業改善の柱とされている「新大分スタンダード」を参考にすることから始めた。その特徴は、『めあて・課題・まとめ・振り返り』を重視した授業「思考を整理したり、思考の過程を振り返ったりできる板書の構造化」「習熟に応じた指導」「主体的・対話的で深い学びを創造する学習展開」である。この取組は、高等学校の授業改善にも有効であると考えた。

まず、単元ごとに「生徒に身に付けさせたい力」を設定するために国語総合における『C読むこと』の指導事項と現代文B・古典Bにおける指導事項との関連をまとめ、各学年において当該学年の生徒に付けさせたい力を「達成目標」とした。単元ごとに付けさせたい力が設定された後は、それを生徒に提示するために「単元目標シート」を作成し、単元ごとの教材で言えばどのようなことができるようになって欲しいのかを生徒に提示するようにした。このシートによって、これから学ぶ単元で何が求められているのかを生徒たちは理解した上で授業に臨むことができると考えた。

更に、単元の中で、生徒たちが何に気づき（もしくは躓き）ながらゴールに向かっているのを見取るために「授業振り返りシート」を作成した。生徒たちがこのシートに記入した日々の授業での発見や気づきを見取ることでクラス全体の、また生徒個人々のゴールに向かう様子を授業者が把握でき、場合によっては方向修正ができると考えた。

- ②「観点別学習評価の工夫改善」について

評価の仕方については、どの学校でも頭を悩ませていることであり、本校も例外ではない。「身に付けさせたい力」が付いたか否かを見取るため、「考査作成の際の国語科内での検討」「単元の導入期・中盤・終わりにおける記述物による評価」に取り組んだ。「単元で付けさせたい力」が付いたか否かを定期考査で見取るため、学年担当が問題を作成する。その問題を木曜日の3・4時間目に行われる教科会議の中で討議し、国語科全員で、力を見取るための問題作成に取り組むようにした。この取組は、力の見取り方について異なる視点から意見を出し合うことにより、評価の工夫改善になると考えた。

「身に付けた力」を点数化するには、目に見える物（記述物）を評価するしかないと考え、単元の最初もしくは中盤に1回、そして単元の最後に1回、特に単元終わりでの記述は「教材から読み取ったこと」と「自分の身の回りの物事」とを結びつけて考えさせる800字作文を書かせるようにした。生徒たちは、「単元の最後には〇〇のテーマで作文を書くこと」を単元に入るときに予告されているため、使用教材の内容の方向性はある程度理解した上で授業に臨んでいる。

単元における評価については、1年目に訪問した岡山県、今年度訪問した神奈川県の高校においても本校の評価の方法と同様であった。現在本校の取り組んでいる方向が他校における取組と大きくかけ離れたものではないことが分かった。

3 研究の成果と課題 (○成果●課題)

① 「読むこと」において、生徒同士の協働性を重視した言語活動を通して思考力・判断力・表現力等を効果的に育成する学習・指導方法の研究について

○単元の終盤にさしかかってくると、休み時間の雑談の中で作文のテーマについて話している場面も見られるようになり、徐々にではあるが、国語科が目指した「授業で学んだ内容を自分に引き付けて考えることができる力」に生徒たちも向かうようになっていくとともに、記述物の内容も3段階評価のC評価が減少し、A評価が増加した。

○国語総合の「C 読むこと」に関する力と、現代文B・古典Bの指導事項の関連性を整理することで、「生徒に身に付けさせたい力」の設定がし易くなった。また、授業と評価の流れを整理することで、各単元での授業の進め方に本校のスタイルと言える「型」が確立できた。

○学力の面において、対外模試の記述問題の得点率を7月・11月分において比較してみると、1年生が29.8【22.4】%から42.3【33.2】%に向上、2年生は32.7【25.5】%から53.5【38.5】%へと大幅に向上した。(【 】内は全国平均) この結果だけでは、国語の学力が全般に向上したとは一概には言えないものの、現在の取組は学力向上に一定の効果があると考えられる。

●年度初めの授業改善推進委員会において、各教科における「深い学び」の定義を検討することになり、国語科は「授業で学んだ内容を自分に引き付けて考えること」と定義した。この定義に基づくと、国語総合及び、現代文B・古典Bでの各単元は、国語総合の『C 読むこと』のオなど「考えの形成・読書・情報活用」に関する指導事項を踏まえた単元が相対的に多くなることとなる。これらの単元で「身に付けさせる読む能力」は比較的高次なものであるため、その力を身に付ける前提となる力を確実に身に付けさせる指導計画及び授業展開が必要となる。

●生徒の「深い学び」を実現するには、言語活動を始めとする授業の進め方において、生徒に教材と主体的に関わりを持たせる仕掛け、協働的な学びにつながるような発問など、更なる工夫改善が必要である。

② 学習評価の工夫改善の研究について

○「単元目標シート」及び「授業振り返りシート」を活用することで、生徒は日々の授業が、何につながるのかを理解した上で授業に臨むことができるようになった。

○「身に付けた力」の見取り方を、記述物による評価に統一したことで、信頼性と妥当性が担保されるとともに、評価書の負担が軽減されることとなった。

●単元で「身に付けた力」を、記述物以外で、よりきめ細やかに見取る方法について、現状で充分なのかどうかは検証できなかった。

4 今後の取組

○生徒の「深い学び」につながる、発問・言語活動の研究。

○単元で「身に付けた力」を、よりきめ細やかに見取る方法についての研究。